

明野歴史民俗資料館 第12回企画展 ほくと文化財の家

前号に続いて、明野歴史民俗資料館 第12回企画展「ほくと文化財の家」のご紹介をします。前号では、国指定重要文化財の「八代家住宅」と「旧平田家住宅」の説明をしましたが、今回は、「北原家住宅」と「台原家住宅」について取り上げます。

(内海)



◆北原家住宅◆ 北杜市白州町【山梨県指定文化財】

建物規模【桁行:29.09m 梁間:18.18m】銅板葺き(当初板葺き石置き)切妻造り
寛延2年(1749)頃、信州高遠栗田で酒造業を営んでいた北原伊兵衛が、所用の際に一泊した台ヶ原に休醸中の酒屋があるのを知り、土地建物および酒株を買受け創業したのが始まり(現七賢醸造元)。明治13年(1880)6月、明治天皇の巡幸の際に行在所(※)として使用された。家相図より、現在の母屋は天保12年(1841)から嘉永7年(1854)の間に建てられたと考えられる。

※天皇行幸の際の仮の住まい

◆台原家住宅◆ 北杜市白州町【北杜市指定文化財】

建物規模【桁行:15.45m 梁間:9.09m】銅板葺き(当初板葺き)切妻造り

台原家は、安政元年(1854)生まれの当主が医者になるまで、台ヶ原宿にある荒尾神社・田中神社の神主を勤めた家柄。家に伝わる系図より、台原家住宅は元禄13年(1700)の建立と考えられる。屋根は当初板葺きで、板材には栗が使われていた。

※「台原家住宅」は、個人住宅のため通常公開はしていません。



古民家見学ポイント

○養蚕と民家

養蚕が盛んになると、棟に換気のための高窓をつける、湿度の低い中二階辺りの屋根を切り上げる、南面や東西の妻面に採光・換気のための開口部を設ける、などの変化が生まれた。



【八代家住宅母屋(昭和50年頃撮影)】

※切上屋根は昭和52年の半解体修理時に改修された



○手斧と鉋

材木の表面を平らに削る道具として、古くから手斧が使われてきた。手斧より、より滑らかに削れる道具として鉋が発達し、室町時代には台鉋が登場したが、民家建築に取り入れられるのは遅く、江戸時代に建てられた家でも手斧仕上げの柱を見ることができる。

写真:【手斧削りの柱】台原家住宅



○竿縁天井と根太天井

「竿縁天井」は、梁から釣り込んだ化粧の釣り天井であり、接客用の部屋に使われる。「根太天井」は、上階の部屋の中央にかかる床梁に、「根太」と呼ばれる横木を一尺(約30cm)から一尺五寸程度の間隔で垂直に渡し、その上に上階の床板を張る。居間や寝室などの実用的な部屋に使われる。

写真:【竿縁天井と根太天井】